

部誌



高津高校
ハンドボール部

2

3



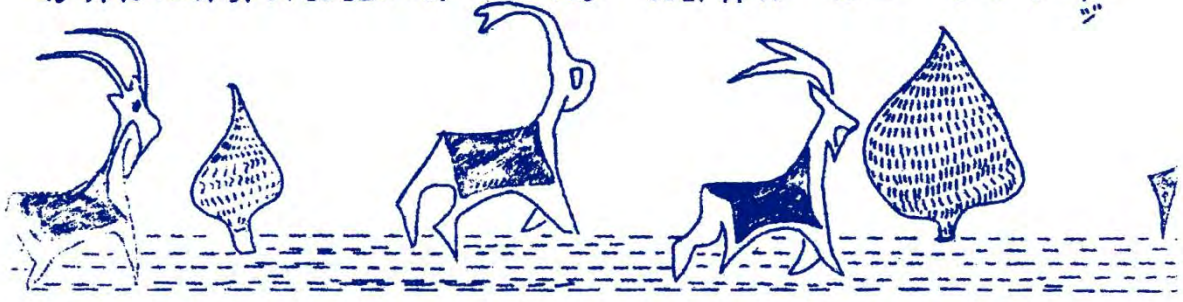
初優勝記念号

高津ハンドボール部

目次

スポーツについて思うこと
 送球 男子の部
 思い出すまゝ
 試合
 高津クラブ近況
 高津H部泥中にある時
 現役諸君の為につまらん話
 敵もさるもの
 楽しかったあの頃
 私のハンドボール生活
 無私の練習
 手紙文
 ハンドボールの味
 活躍する高津クラブ勢
 私のハンドボール
 現役の時をふりかえり
 五年一日
 戦績
 雑感
 勝利の女神
 「和」精神カレ
 苦しい思い出
 先輩と後輩
 我が無台を見て

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	3期生	校長	顧問	旧22期生											
鈴木栄太郎	松村圭造	前田宏之	松倉建樹	青藤英俊	井口邦男	渡辺有顕	林野毅	浅野和郎	石崎寿夫	中江義雄	辻本陽之助	佐竹貞夫	西田武彦	松田一彦	山中将司	渡辺巖	上田孝	額田晃作	佐々木蔵雄	橋本靖雄	小西英博	田中さや	山川信夫		
48	46	45	44	43	41	39	38	36	34	33	31	29	28	27	26	26	25	23	18	16	14	10	8	5	4
46	44	43	42	41	39	37	36	32	30	29	25	24	23	22	21	19	14	12	10	8	5	4			

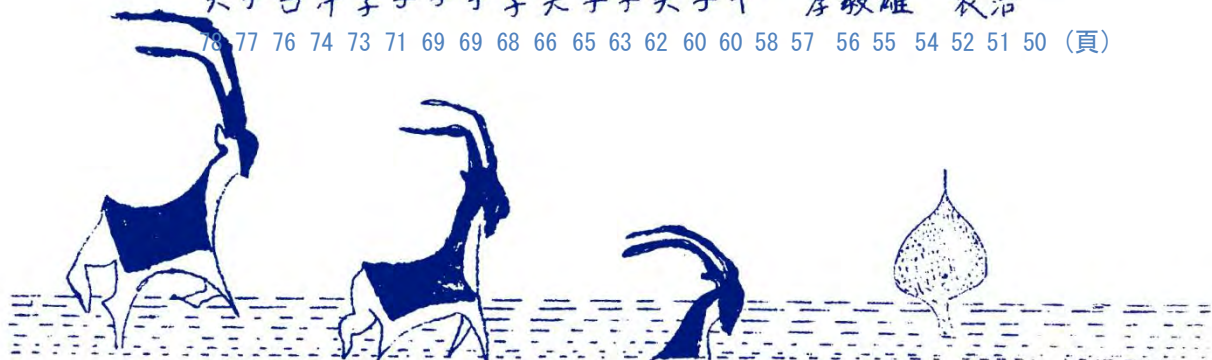


反 誘りとほニリ 感
 先 輩
 ハンドのラツパ
 夢中だった現役時代
 全日本室内大会を見て
 女子ハンドボール部の誕生
 雛
 女子送球部の道
 ジャンプシュートの思い出
 苦しかった思い出
 ハンドボールで得たもの
 有意義なハンドボール生活
 戦績
 クラブで得た事
 卒業にあたって
 私のクラブ生活
 ハンドボールと私
 感じたまゝ
 入部して
 クラブに入って
 編集後記

16 15 14 13 12 11 9 8 5 13 14 16
 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

西本由治 一年代表
 田中忠雄
 林中毅
 上田孝
 田中さや
 徳美恭子
 菊井清美
 井上晴子
 浅野朝子
 安田久美
 安村かつ子
 久保田順子
 藤原芳子
 佐藤順子
 佐々見淑子
 西屋千洋
 門田真弓
 南部清子
 木下保美

78 77 76 74 73 71 69 69 68 66 65 63 62 60 60 58 57 56 55 54 52 51 50 (頁)



スポーツについて思うこと



われわれの学生時代には、球技と言え、野球、庭球、サッカー、ラグビー位しかなく、今は、球技の種類も多くなり、学生諸君は、自分の身体と好みにあつた、いろいろの球技を扱つてゐるので、その意味でも、今の学生諸君は恵まれてゐると言える。

ハンドボールは、どの国で初められたものであるか知らなけれど、運動場も多く、ルールも極めて合理的に、又面白く定められていて、プレイヤーの身体の高さや、運動場も多く、神経が鍛磨されるようになったり、高度のスポーツだと私は思う。私が高津に赴住して、まもなく、グラウンドで練習を見てゐると、今中先生が、うちのハンドボール部は、勉強もよくできる子が多いですよ。と誇らしげに言つたことが記憶に残つてゐる。

勉強や読書をするのが、青年の特権であることに、スポーツをやつて、身心を鍛えておかないような人は、社会に出て、きびしい仕事には耐え難いことを、われわれの経験が教えてゐる。

今回、ハンドボール部誌が創刊されるのであるが、これを機として、先輩後輩の連絡、協力が強化され、益々よき伝統を樹立し、部員が、科学的で、且まぎし練習を上げよう、先輩並に部員諸君にお願いしてゐたい。

山川 信夫

伝統

田中 さや

此の度、ハンドボール部高津クラブの部誌創刊号が発行されるにあたり、何か書くようにとの仰せでしたので、年々の発展して来た高津ハンドボール部の十余年間を振り返って見て、思い出されるまゝに書き並べさせていただきます。

高津高校に私がお世話になりましたのは昭和二十四年四月です。このクラブ創設者へ高津三期生の運動クラブと比べて創設の時でした。他の運動クラブと比べてハンドボール部だけが、三年生の部員は一人もなく、二年生で盛んでした。居られ、へ當時は三年生も盛んでした。しかも高津の優等生・模範生で占められたクラブで、外から眺めている私の目には、大へんなごやかなクラブに写っていました。当時の高津の体育科は、清水谷との交流で、畑中先生へ現高津非常勤講師の清水谷へ行かれ、清水谷から見えた守山先生へ現城東高守友先生も二十四年五月に黒山高校に転勤され、森岡先生は定時制の専任となられ、岡本先生へ現岡安証券社長も御自分の会社でお忙しくて無給の講師とな

られ、時たまに一寸顔を見せられる位で、授業の持ち時間は勿論なく、従って実際の授業をするのは、四月に共に転勤して来た村田先生へ現三国丘高校、大阪ハンドボール協会常任理事と私の二人だけという有様でした。ハンドボール部としては、村田先生という、実に良い指導者を得たわけだったのですが、前記のようないさまで村田先生もお忙しくて、つきっきりのコーチなどとても望むことはできませんでした。でもチームワークの良いことはうらやましい位で、よくまとまったチームでした。こうしてハンドボール部の活動が開始された。翌二十五年早々に跡部先生を迎えましたが、その四月に村田先生は在取わずか一年で三国丘高校へ転任されてしまいました。その後へ島田先生へ現阪南高校へ、荒木先生、そしてその翌年に鳴川先生へ現大阪外大講師が、お見えになり、ハンドボール部の顧問とされたので、すが、鳴川先生はバレー部の部長と兼任され、バレー部の協会の方で仲々お忙しい身分でした。

以上のようにハンドボール部としては創設以来指導者には恵まれませんでした。しかし、次から次へと上級生から下級生へ、先輩から後輩へと自分達の手でクラブを造り上げ、自らの手で指導して来たわけです。

これは一朝一夕に出来るものではありませ
んが、過去十余年間の皆々様の努力により
造り上げられて来たクラブの伝統の良さ、
即ち、高津の自主的な本当の良さが、クラ
ブ発展の上にも發揮されたわけでありませ
。夏の合宿も創設当時のキャプテンの橋本
さん等、社会人となられてからモタ方会社
が済むとすぐに学校に来て、夕食后消灯時
間までを利用して、ルールの研究や練習法
についての話し合い、朝は五時から出勤まで
の時間を利用してのコー子等、寸暇を惜し
んでの指導の姿も何年間か見かけました。
女子のハンドボール部が、八期生の徳美
さんや北野さん達の手によって創られる事
になった年から私は、ハンドボール部と直
接関係するようになり、それ以来、過
今日までの間で最も印象深い思い出は、過
本陽之助さんをキャプテンとした昭和三十
年の夏、楠木通りを中寺町に入ったお寺で
の合宿です。

その年の四月、関学に入学以来本格的な
ハンドボールの練習を始められた榎本秀一
郎さん、津田さんの兩人を中心として、山中将
可さん、岡部正文さん等多数の先輩による
コー子で、辻本・佐竹・金沢・大西・今村
・小林・木下・吉川の二年生に、梶原・高
田・神元・林の一年生を混えての合宿。

午前四時五十分、コオッキョーの津田さ
んの声に一斉に跳び起きる時から、一日の
生活がはじまります。寝具の片付け、部屋
の掃除、ユニフォームに着換え、洗面具を
待って、シューズをばいて表の道路に並ぶ
までわずかに十分、そして午前五時、ツファイ
トの掛け声と共に町に走り出し、数軒の
駄足をして学校の運動場へ、体操をし
て、馬跳・うさぎ跳等、からだじゅうが痛
くなるようなこと多い早朝の練習です。
入部して日の浅い吉川さんや林さんの脚
がカチカチになって膝が屈らなくなったの
は、四日目ごろからでした。林さんの脚が
固くなって、あさえても少しもひっこまな
いので、コテッキンコンクリートのよう
に固い山といった所から、テッキンと呼
ばれるようになった所から、テッキンと呼
ぶようになる。現在のニツクネーム、テ
ッチンが始まり、前田校長先生も
、五時半頃にはいつもさまたて運動場にお
見えになって、まがらない足に手をみさえ
て努力している傍まで来て、コカンバレ
がカンバレ、と声を掛けて励まして下さ
ったものです。

こうして七時半にオ一回の練習を終えて
から洗面、ついで朝食、午前九時より、
再び練習開始、十二時の昼食後は、教室や
運動場の木陰等、それ〴〵涼しい所を求め

この昼寝、三時より三回目の練習開始、
この午後の練習は、全期間中合宿を共に
して下さった先輩に、次々と激励に見える
先輩方も加わって、時には生徒とコーチが
同教位になる時もある。げいし練習でした
。六時頃やると練習を終えて、学校の食堂
で夕食をすませて宿舎中井町のお弁へ帰り
ます。この帰りがまた大変なのです。わす
かの道程を一時間余りもかかって帰る。よ
ごれたユニフォーム姿で、重い足をひきづ
りながらとぼくと帰る姿は、今思えば上
てもみじめなものです。一番困ったのは上
本町四丁目の電車筋を横切る時です。わす
かな青信号の間をわたってしまわねばなら
ない事です。こうしてやっとお弁に帰り、
直ちに浴場に行き、風呂を足や肩を揉み、あ
たりをぬぐう。八時半頃より研究が始
まります。ひきつづいて反省会です。一年
生から順に全員が一日の生活を振り返って
見て感想を発表するので、反省会を終え
ると直ちに寢床を取ります。壺り沃山のス
ケジュールで九時半には就寝したので、
がいつも消灯は十時近くなっていました。
昼間の激しい練習に消灯後の話し声など、
どこにも聞けない。今身体をよこしたか
と思ふとたちまち気が持たない寝息が、
と聞かれます。唯私一人だけが目を覚まし

ていいる。こんな忙しい一日の生活の中にも
宿舎では暇をみつけて岡部さんから数学の
宿題を教わったりしている人も何人かあり
ました。
お互にいたわり合い、助け合って規律正
しい生活を週間続けた事によって、技術
・体力・精神力・チームワーク等は、うに
及ばず、人間性としての多大の収穫を得る
事が出来ました。
一年生の梶原さんは合宿を終えて帰る日
に二日の一週間ほどとも良い生活をした。
一日が充実した無駄のない生活でした。
今まで家では朝も遅く起きていたのが、何
なすことなく一日を過ぎていたが、よい習
慣がついた。早く目がさめるようになった
から、これから家に帰ってからも早く起き
て勉強しよう。充実した一日が過ぎて能率
が上がるだろう。と、とても喜ぶそう。な
顔で話したものでした。
その後、先輩の方々の御指導によって、
高津ハンドボール部は、隆盛の途を
たどり、昨年独乙遠征の日本代表選手を送
る室内競技が、府立体育館で催された時の全
大、選抜選手に、我が高津クラブからも、
肉西学生ハンドボール連盟理事長の中江さ
ん(同大)、浅野さん(京大)の二人が選ば
れたのを初めとして、辻本・高田(府大)

服部(関学)・石崎(京大)・林(歯大)さんと現在も各大学で活躍している優秀な人々が多くあります。

最近は大野さんにとっても熱心に、毎日のように指導していただき居りますが、今年には学生の部員数が少ないので、一寸寂しい感じがします。十余年間の先輩方の努力によって築き上げられた立派な伝統を傷つけないよう、いや、ますます「発展・繁栄」を望みますように現在の在学中の人々の努力を望むと共に、高津クラブ(H.O.B.O.G)の隆盛を祈り致します。

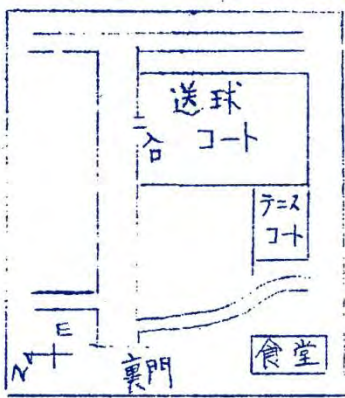


送球

小西 英博

ドリブル……パス……ドリブル……シュート……グラウンドのはしからはしへ、一つのボールを追ってひたはしる。頭にはボールと敵味方の動き以外は何もない。体力と技術のあらうん限りを出しつくしての何十分間の緊張と躍動とは青年の心をひきつけずにはおかない。ハンドボールクラブの依頼でこの文を草し一つ、心はその頃のグラウンドを走りまわっている私の姿を追っているのを感じる。その頃——昭和十四年——は「送球」と言っていた。今日のハンドボールが日本へはいつまでたの間のない頃であった。送球の祖国ドイツからチームが来日して親善試合をしたりしていた。当時の高津中学校は、時の校長羽生(はにゅう)隆先生の教育方針に副って、対外試合をする運動部は全くなく、そのかわり全校生徒が、バスケットボール、バレーボール、フットボール(サッカー)、テニス、送球という五つの種目のどれかに属して週一回、所定の曜日の放課後運動をするることになった。先生方もその中のどれかかの指導に当たられた。一年は月曜日、

二年は火曜日というふうな学年ごとに曜日が決められ、五十分間、練習したり試合をしたりしたものだ。サッカーは現在のグラウンド、バレーはグラウンドの北寄りのコート、バスケットは体育館、テニスは食堂の東側、そして送球はその東側でおこなった。食堂の東側から、真田山公園西側を走る南北の道路にかけて、第二運動場があり、それが我々の送球コートであった。次められた日の第六時限がすむと、せいぜいに体操の服装に着がえ、通学服を体操袋に入れて北館のグラウンドに面した壁につくられた袋かけに体操袋をかけ、当番がボールを持って全員第二運動場に集合、点呼、準備体操の後、球技にうつるわけである。クラブではなく、すべて先生の指導によるものであるから、現在の諸君のように、自主的に練習計画をたてて練習し、練習が終わってからの語らいにクラブ員の親しさが密になるといふこととはないが、それにしても、チームメイトとしての親近感が全然ないわけではなかつた。



た。当時は五月に、花園ラグビー場で運動会があった。これは、所謂運動会である。その後十月の末まで、先に書いたような方法で球技を練習し、十一月の、たしか一、二、三の三日間だ、たと記憶するが校内球技大会が行われ、勿論授業なし、トーナメントでフラスコ対抗試合により優勝を決めた。送球には送球、バスケットにはバスケットと、それぞれに応援歌があり、試合当日、開始前と終了後に全員で歌い氣勢をあげたものだ。その頃は一学年六クラスであつて、一位から六位まで、順位によつて得点が与えられ、五つの部門の得点を合計して総合優勝を決めた。クラス全員がどの部門かに必ず属していたせいもあつて、関心が強く、大会期間中は相当に興奮したものである。府立中学校も大部分は運動部を持ち、対外試合をし、全国大会等にも出場したりして、いた中であつて、高津のこのやり方は特殊なものであつた。新聞のスポーツ欄に名の出ることもなく、又、全員が選手だ、だから、技術的にはさう高度なものも望むべくもなかつたが、ともするとかたよりがちな運動に、全員が参加するといふこの方法は、それ自体一つの教育的見識をあらわすもので、相当高く評価されて然るべきものではなかつた。

のと思う。又、時代は徐々に、そして後には急速に軍国主義化、国粹主義化し、外国の球技などするひまがあれば日本の武道をやれ、外国の球技をする奴は、外国かぶれの非国民であるというふうだ、今から思えば滑稽ともみえ、さちがいじみてゐるとさへ思える風潮の中にあつて、昭和十八年頃までこのような球技をさせてくれた学校の態度には、顧みて無条件に感謝の念を持つ。母校卒業後の進学先でこのことを話したら、全国各地から来ていた友人たちは殆んど皆おどろきの声を発したほどであつた。又しぶりに回顧して、今さうのようになつてしまふを覚える。今グラウンドを走りまわつてゐる諸君も、いつかは私のように、今をふりかえつてなつかしさをおぼえることである。その時期が充実したものであればあるだけ、ふりがえつた時のなつかしさは大きく深い。今を充実したまへ。ボールを追つて走る諸君の姿をみて、そのみながる若さ力強さに昏のはころびを感じる。時代の明日をになう諸君のエネルギーに大きく期待する。

自分のシニョトで優勝を決めたうれしさはいつになつても忘れられない、ひそかな喜びであり、ささやかな誇りでもある。

ハンドボールをあまり(全然?)御存じでない校長先生の為に、またハンドボールをやつていながらその起源や歴史を御存じでない方々の為に「ハンドボール略史」を書いてみたいと思ひます。

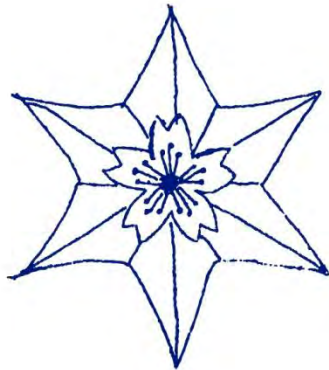
ハンドボール略史

ハンドボールの起源は古代ギリシア、ローマ時代からである。当時ギリシアではハルパストーン、ハルパストウリと称するゲームがあり、ボールを奪い合つて所定の位置に投げ込むゲームであつた。これが今日のサッカー、ラグビー、ハンドボールの始まりと考えられる。ハンドボールの形をした球技は、一九五一年トリアバル(門球)という名称でドイツで女子体育興隆の意図の下に考案され、欧州諸国に普及するに及んで、男子にも次第に愛好されるに至つた。現在のハンドボールはドイツのカール・ゼ



レッによつて創案された。そして一九二〇
 年にはベルリン体操連盟が正式のハンドボ
 ールの規則を制定した。そして翌二十一年に
 はこの規則によつて、全ドイツハンドボー
 ル選手権大会がハンノーバで挙行された。こ
 れがハンドボール競技会の最初である。つ
 いで一九三六年のベルリンオリンピック大
 会には正式種目として加入されドイツが優
 勝した。

日本では一九二二(大正十一年)当時の東
 京高師(教育大)教授の大谷武一氏がドイ
 ツから紹介し、その後新教材として学校体
 操要目として採用された。スポーツとして
 は一九三七(昭和十二年)第一回関東ハンド
 ボール選手権が行なわれた。太平洋戦争中
 は、戦力即ちスポーツという思潮が当時台
 頭し、平和であるべきスポーツにも、その
 実施の制限があった事は悲しむべき事であ
 った。それでもハンドボールは女子のスポ
 ーツとして制限外におかれたが曲りなりに
 も継続していた程度で、思うほどに進展し
 ないうちに終戦となった。一九四六(昭和
 二十一年)の春には早くも東西対抗を行い秋は
 復活第一回国民体育大会が大阪を中心に行
 なわれたが、ハンドボールも各種目別の東
 西対抗で参加した。以後年々益々盛んとなつて
 いる。しかし、ハンドボールはまだ一



般によく認識されていない。野球のごとく
 庭球のごとく多くの人が親しまれてい
 ない。この事実を否定し得る時が一日も早
 く来るようにと我々は願っている。

さて、我が高津ハンドボール部も創立以
 来十余年を数え、その活動も、常に活発に
 してなごやか、社会に大学にと有能な人物
 を送り出して益々発展の途上にある。そこ
 で、現役諸君に自らの立場を自覚し
 、今後のクラブ発展のため、全力を
 傾注してもらう意図をもち、OBの
 思い出話などを綴って頂いた。

男子の部



三期生

思い出すまゝ

橋本 靖雄

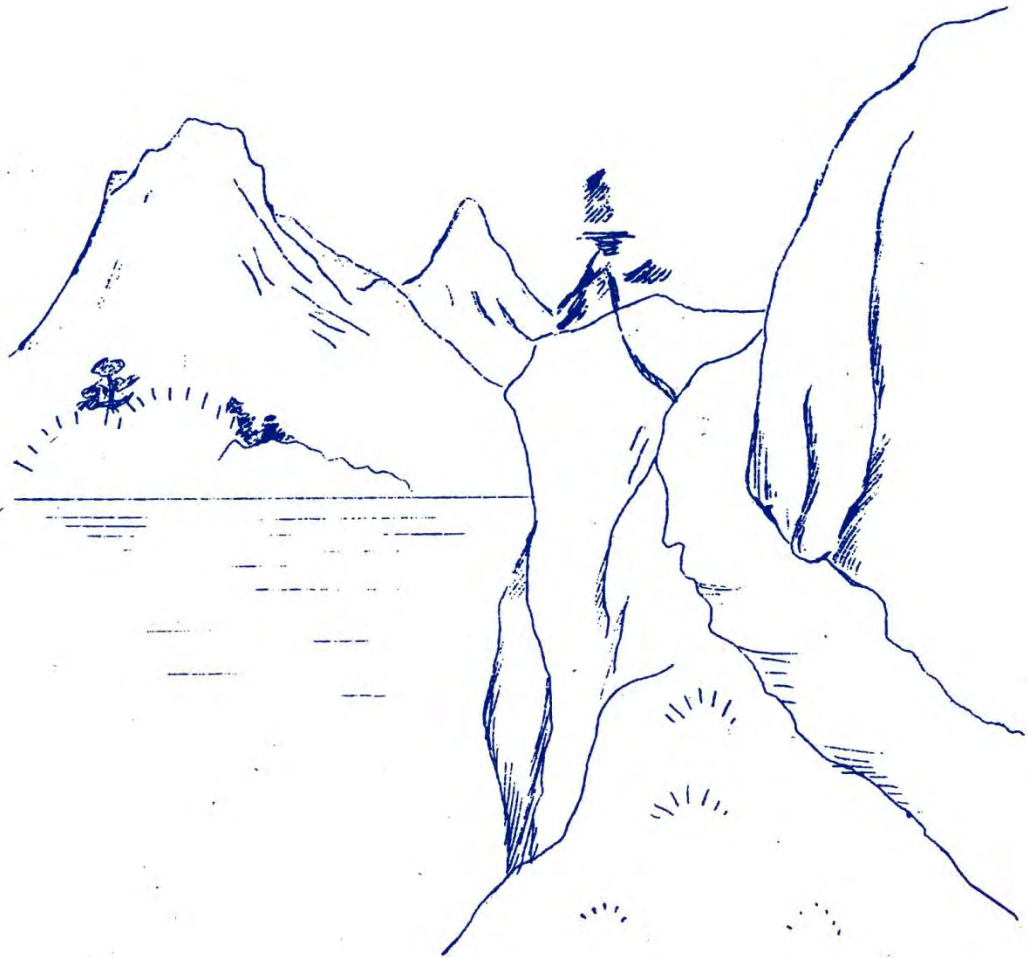
私は高津ハンドボール部の創立は知らないが、過去と現在が大きく違う様に、当時の部員の状態の感じ、合宿等の憶えている事を記したいと思う。入部したのは中学二年の終りが三年だと思ふ。バレー・テニス・野球・バスケットへの入部者は多勢だった。最上級五年でチーム、四年一人、三年数名とリフト程度だった。当時の主将は高山さんだったと思ふ。メンバーで記憶にある人は、五年に高山、黒田、橋本、堀内、四年に稻本、三年に塩谷、林、米田、和田、山田や若村、そして私位である。やがて上級生が卒業し、三年の我々が主力として再建せねばならなくなった。杯、塩谷両氏と力を合はせ、同じ学年の部員募集をした。一チームを作り、次の代に受け渡したのだ。当時の試合は、シニアとシニアの二つに分けて行われた。シニア

は、四・五年を含んだチーム、ジュニアは、三年以下のチームである。現在の新人大会のやうなものだ。戦績としては、ジュニア大会で準決勝迄行ったのが、最良の出来と思う。延長で北野に敗れた。シニアはあまり試合をしていない様子である。高一の時はすべての大会に参加した。現在の様に参加料はとられないし、登録等もいらなかった。他チームは、上級生が二、三年ばかり、善戦するのが良い方で、勝つことはまれであった。けれど、高津にも組み易い相手があった。勝山校、二つも高一ばかり、けれど三年の時には、勝つたり負けたりする様になった。協会でもこのチームは高三になればきつと優勝と云われながら、高津独特の学内攻勢の為、チームの維持は出来ず、春の大会が引退試合で、高一へと変って行くのである。この習慣は、徐々に変わっていった。次に練習の様手である。我々には一人として卒業生のコーチは来てくれなかった。まだ中学生の時は近藤さん(当時は南学の現役)が来て下さっていたが、この人が来られる時は少し変わった。南学でも主将で相当やる人であつたらしい。上級生と練習をしていては、一諸に感じていた。チームとして、一諸に感じていた。

・唯、試合前だけはチームらしい感じも受ける練習である。他校では卒業生が一牛一馬位来てくるとか耳にするとかやしかつEが致しかたなかつた。当時の体育教官の岡本先生が、豊川高女へ連れ行つてくれ、これが最初で、しばらく齒科大のコーナが続きEと思つてゐる。高ニの時教会の仕事をし、ハンドボールの村田先生が体育教官になられた。初めのうちは見てくたさつたが、我々も集りがわるくなり、だんだんみてくたさなくなり他校に転校されてそれ切り。先生に対して不平もあつたが我々にも反省せねばならぬところもあつた。高三になつて高一の多数の入部を得た。一年下は少なく三名で、又、熱意のなげであつたので期待せず、高一に希望を持ち、自分のふんだみ味わふことなく過ぎせようと思つたが、後々は、部員でやはり少し苦勞した様であつた。又、物的にも思ふまゝでいなくなつた。ボールにしても破れたら自分で縫つたり、パンクすれば自転車を屋へ行つては、たり、教も少なくそれだけ大切にしていた。例之はボールをけると、運動場を人より二回余分にまわるとかしたものであつた。次に、一番苦しかつたのは合宿である。コーナはなし、付添の教官

はなし、炊事も交代で行い、用意さすめば皆と同じだけ練習、体重も減つたことは確かだ。筋肉は痛いし、寝るところは三階と来ている。階段で何度か休んで上つた。苦レか、ただけに印象深く残つてゐる。次に、部屋の件にしてもある部は幸福な方で、最初は運動場で着がえていた。やゝのことでもらうと、戸をつけて鍵をつけねばならなかつた。よくこわされるし物もなくなつた。最大の被害は試合中にズボンを取られた。どこの学校もよくあつたらしいが、我々は、まだ被害の少ない方であつたらしい。ルール上に於いても変化してゐる。オフサイドラインとラインアウトとだ。我々の最初は、直線でラインアウトはその場から留で投げた。卒業して十年もたつた。部の後輩は我々より、よい戦績と、よりよい態度と立派になつてゐた。卒業生に対する礼儀も、他の部に比べると非常によく、嬉しくも誇らしくも思つた。現役時代の苦しみは懐しく思ひだされてきます。最後により一層の発展と活躍を祈つて居ります。

女子の部



女子 ハンドボール部の誕生

田中 丁ヤ

浅野和郎さんから、十月始め頃に、此度ハンドボール部高津クラブの「アジ」を作ろうと思うので、何か書くようにとの話がありましたので、クラブの雑誌と思い込んで、校長先生にもそんなつもりで原稿をお願ひし、私も前ページのような事を書いたのですが、編輯中に、お手伝ひして色々話したり、他の方々の原稿を読んだりして、内には「アジ」は「部誌」の事で無く「部史」である事を知った次第です。又、浅野さんからの話だったので、男子のクラブの事と思い込んで書きました。が、女子クラブも合同で作るからもう一度女子の事も書くようにとの話したので、再びここに、女子ハンドボール部創設当時の記憶をたどり、思い出を書く事に致します。

昭和二十九年の末の頃、男子ハンドボール部の人達から、「よその学校では男女クラブがあるのに高津は男子だけで……女子も有れば良いと思ひます。が、女子のハンドボール部が出来ると先生はどう思われませんか？」と聞かれ、ハンドボールは起源から言えば、ドイツで女子のスポーツとして

トリアバル（内球）と云って始められたものであるから、女子のクラブがある事は望ましい。争ひは、私の考えを述べますと、「アジ」や先生、女子のハンドボール部を作られたらどうですか」と話しかけられました。高津のクラブは、教師が作るのが主旨でないでしよう。生徒の中から盛り上げて出来るのが、クラブのあり方ではないでしようか。とそんな内容が取交され、又教員して、女子のクラブを僕達ではやはり作りにくい。女子の体育を受け持つ先生にやってみてもらはないかと。とこんなやりとりがそれから何回も繰返されていくうちに、何の種目でも器用で、運動好きだが、テニスの種目をやめていた二年生の徳美恭子さんに、ふとした機会に男子の人からこんな話があるかと話した所、お母さんもずっと学生時代バレーボール部で遊ばれたスポーツ一家であるだけに、北野さん等、教員の友達と話し合っているうちに、クラブを作ったやうにたくなつたようです。昭和三十年の二月頃から急にクラブ作りの話題が活発になりだしました。同じ頃男子の辻本さんや佐竹さん達が同じ一年生の菊井さん達にこの話を打ち掛けたのでトニック（拍子）に進



みました。自治会のクラブ成立の条件に五
 名の發起人と顧問があれば成立するからと
 、私に顧問の依頼がありましたので、お引
 換致す事になり、年度の変わった四月に生
 徒の議会及び職員会議で正式に認められる
 ようになりました。この三十年の四月から
 男女ハンドボール部の顧問を致すことにな
 りました。こうして女子ハンドボール部は
 産声をあげましたが、クラブが本式に活動
 を開始した時には發起人の徳美さんや北野
 さん達は已に三年生で、練習はわずかの間
 で公式戦に出る機会には恵まれませんでした
 が、今宮高校や八尾高校へは応援に来て
 もらったものでした。菊井さん・吉川さん・石
 丸さん達は二年生として活躍、一年生に入
 学した荻原さん・岩瀬さん・波木さん・山口(現在
 長屋)さん等、四月早々から多数の入部者が
 ありました。二年は皆とても熱心に練習
 しました。ペワイールドハンドボールで男子
 と同じルールです。チームワークもとても
 良く、一二年生全員でお正月の五日に私の
 家まで帰ねてまられて、にぎやかな一日を
 過ごしたのも楽しい思い出です。しかしクラ
 ブ創設の年です。から戦績は振いませんでし
 りが、二月初旬の室内大会には初出場が
 三位に入賞し、高津女子ハンドボール部の
 名を大いにあげたものです。

その後学校の方針でクラブ顧問を一人一部
 になり女子のみの顧問になった年や男女両
 クラブの係りを二人の先生でした年や男子
 のみ見て来た年と色々な年を経て今日まで
 来ました。大阪府下で一番運動クラブ数の
 多いと言われる高津高校の運動部中最も親
 しみを感じる私にとって、切り離せないク
 ラブがハンドボール部です。

楽しかった
 思い出

昭和32年11月3日、一、二年生
 の男女ハンドボール部全員が、
 京阪天満に集合して私市へハイ
 キングに行きました。三年生の方には入試
 前だから勉強をしてもらはねばならないか
 らと何も話さず内証で行きました。(あと
 でばして誘ってくれたらと言われました)
 二年生男子の谷口さんは、満員電車の中
 で薪を拵って大弱り。私市からくろくろ池
 まで良く暗れた空の下、賑かに喋りながら
 歩きました。くろくろ池で飯金炊さん。楽
 しいスキヤキパーティをして、その後男女
 混合の三人がに令れてボートに乗りまし
 た。皆がボートに乗っている間、私だけが
 池の岸で唯一人荷物番をしていました。が
 、この一時間足らずの時間の長かつた事、
 数時間のよう気がしました。それども、
 とても楽しかった一日です。――終り――

編集後記

比の一冊を作成するにあたり先ず困惑したのは、題を「高津クラブ史」にしようか「高津クラブ誌」にしようかというところであった。編集者の不徹底のために原稿の中には「史」とした人も「誌」とした人もあったようだが、根本的には異義のあるはずもなく、唯今後再び比のような企画を期待する意味で「高津クラブ誌」としておいた。企画以来約三月半のガリ極刷りの結果、やっと冊子らしい体裁を整えて来たが、原稿集めから印刷まで、田中先生や現役諸君並びに林、井口君等、年末の忙しさの中を連日御奉仕を願って、やっとこまでござつた次第です。なにしろ素人ばかり、その上原稿の集まりが不定期で、予定が狂ったこともしばしば出来上りは、決して整ったものとはいえないようだ。しかし、比の冊子は、思わぬ所から高津クラブの隠れた一端を発見したり、又、あまり知られなかつた中学校時代のことが、小西先生などの寄稿により明確になったりして、読者諸兄に、懐しさを感ぜしむるに十分のものをもつて、いると確信している。願わくば

この冊子が、従来云われた、OB会・OG会の縦のつながりの疎なる点を、親しい緊密なものにする一助となればと祈っている。尚、今回の部誌は、資金の関係もあり、粗末なものとなったが、ゆく／＼は、専門の印刷所に依頼し、寄稿者も特定の人に限り、より多数の人に寄稿していただければ、文章があるなしにかかわらず、又、折衷生活の長短にかかわらず、せめて読者の現況なりともお寄せ戴きたい。



高津クラブ
ハンドボール部誌
昭和37年1月発行
編集
高津ハンドボールクラブ
部誌作成委員会
発行
高津ハンドボールクラブ
プリント 高津高校
非売品